

「かいふの海菜」育成事業

海藻産品増産支援事業（ヒジキ）

中西達也・谷本 剛

海部郡では様々な海藻資源が利用されている。「かいふの海菜」育成事業ではサガラメ、ヒジキ、キシウモズクの3種について増産するための技術開発試験を実施した。

ヒジキについては、環境の変化に起因すると考えられる生産量減少が問題となっている。そこで天然ヒジキ場における増殖手法として種苗移植の検討をおこなった。

材料と方法

1. ヒジキ種苗移植試験

平成20年7月から12月まで、鳴門市北灘町折野の天然ヒジキ場に海苔網を敷設することで移植用ヒジキを採苗した。採苗後、移植試験に供するまでの間、水産研究所鳴門庁舎前の海面において、小型イカダに採苗した網を張って浮き流し、週に1回程度の割合で干出や雑海藻の除去をおこなった。

平成21年3月12日、移植用ヒジキを網糸をつけたまま株ごとに切り分け、大潮の干潮時、牟岐町砂美の潮間帯下部の天然ヒジキ近隣に、水中ボンド（セメダイン社製エポキシ樹脂系接着剤）で網糸と岩盤凹凸部などを接着した。

結果と考察

1. ヒジキ種苗移植試験

移植直後の様子を写真1に示す。また、移植後のヒジキ藻体長の変化を図1に示した。移植後74日（5月25日）には、仮根部を含む藻体が消滅し、網糸のみが残存した。藻体が消滅した原因として、波浪による物理的要因、食害生物による食害が考えられたが特定できなかった。しかし、移植株近隣の天然ヒジキも、移植株と同様、藻体が仮根部ごと消滅している場所が観察されたので、移植株のみが選択的に消滅したのではないと考えられた。

近隣の潮だまりではヒジキ藻体が残存していることから、潮だまりとそれ以外の場所ではヒジキ生育に係る環境が異なると考えられる。今後、ヒジキの増殖手法を検討するにあたり、この二つの環境下でどのような差があるのかについて明らかにする必要がある。



写真1. 移植直後のヒジキ種苗（平成21年3月12日牟岐町砂美の天然ヒジキ場周辺）

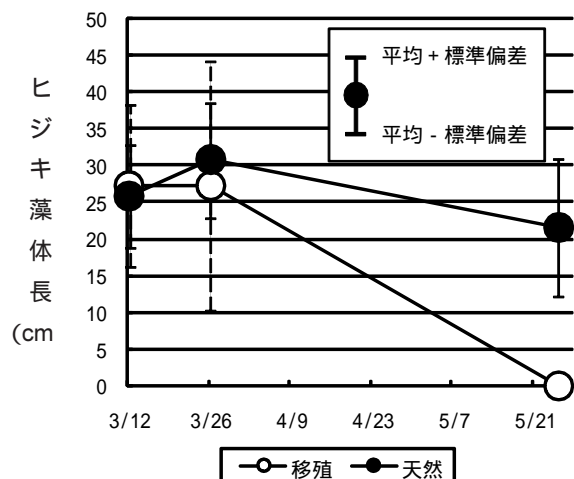


図1. 移植後のヒジキ藻体長